



学会活動報告

Association for Children's Environment

大会報告

こども環境学会2022年大会(東京)

大会総括

こども環境学会2022年東京大会は「クライシスとこどもの環境」を大会テーマとして掲げ、現地会場とオンライン会場のハイブリッド形式で開催いたしました。こどもたちを取り巻く環境の中に多くのクライシスがあることが表面化したのがこのコロナ禍ではないでしょうか。本大会はそれを乗り越えるための議論の場となることを目指して企画いたしました。

開会式では、会場である日本女子大学理事長の今市涼子先生によるご挨拶に続いて、日本女子大学学長の篠原聡子先生に基調講演をいただきました。日本女子大学は幼稚園から大学院までを擁し、さまざまな年代のこどもたちが過ごす場でもあります。講演では、120周年を記念して、多様な空間を繋ぐ中庭により一体的な学びの空間として再整備されたキャンパス計画についてお話をいただきました。

国際シンポジウムはオンラインでスウェーデンと結び、日本でも年々増加している外国にルーツを持つこどもや保護者に対する支援について、ウプサラ大学のベロニク・シモン氏にご講演いただきました。和田上貴昭氏、小澤紀美子氏に日本の状況に関する話題提供をいただいた後に、浅野由子氏のコーディネートによって今後の日本における支援のあり方についての議論が行われました。

分科会は個性ある4つのテーマのもとで開催されました。分科会Ⅰでは会に先立って日本女子大学西生田キャンパスの森でこどもたちのワークショップを開催し、こどもたちが森という自然の中で活動するための課題を取り上げました。分科会Ⅱでは2021年11月に開催したプレ・セミナー「クライシスとこどもの環境」で話題となったこどもの健康に関して、食や運動・遊びを通して地域で支える支援体制についての議論が行われました。分科会Ⅲではこどもの健康を支える食について母子保健事業、学校現場での取り組みをもとに、こどもたちの食に関する意識・食行動についての意見交換が行われました。分科会Ⅳではこどもの精神的ストレスに焦点をあて、実際に行われている支援である運動の体験を交えて議論が行われました。

ポスターセッションは現地会場でのポスター掲出による発表が30題、オンラインによる発表が15題、合わせて45題の発表がありました。現地・オンラインともに活発な意見交換が行われ、そのうち7題が優秀ポスター賞として表彰されました。

また、大会初日のエクスカージョンは、日本女子大学附属豊明幼稚園・豊明小学校の見学、豊島区公園まちづくりの拠点巡り、再整備された日本女子大学目白キャンパスツアーの3つが用意され、それぞれ大変

に暑い中、多くの方にご参加をいただきました。

さらに、昨年に引き続いて若者トークセッションが開催され、学生を含めた多くの若者が意見交換に参加しました。

会場となった日本女子大学では、2011年の大会が開催される予定でした。東日本大震災により中止と

なってから11年経ちましたが、震災は未だ過去のものといえる状況ではありません。コロナという新たなクライシスが子どもたちの生活環境を脅かす現在、多くの方々と問題意識を共有し、議論できましたことは大変意義深いと考えております。ご参加、ご協力いただきました皆様に改めてお礼申し上げます。

(大会実行委員会副委員長 小池 孝子)

大会報告

こども環境学会2022年大会(東京)

大会提言

大会では、テーマを【クライシスとこどもの環境】とし、多国籍ルーツを有する子どもたちの文化的支援や、子どもたちの生きる力を育むための自然環境、子どもたちが健やかに成長するために必要な環境などについて議論しました。国際シンポジウムや各分科会を通じて得た知見のいくつかについて、ここでは大会提言としてまとめました。

提言 1

言語を含めた生活習慣を基本として楽しめるような文化的支援をしよう!

● 国際シンポジウム: 就学前施設における多国籍ルーツを持つ子ども達とその保護者への支援

今後、多文化共生社会を築いていく上での障害を取り除くには、地域のコミュニティ空間を活かし、自然、食文化、アート等の伝統的な活動を多様な視点で受け入れていくことが不可欠であるということが話し合われました。また、日本を外国人労働者が一時的ではなく、生涯移住したいと思えるような国にするには、外国籍ルーツを持つ子どもだけでなく保護者も共に、安心できる空間を提供することの必要性を、ウクライナの事例からも話し合いました。その為には、地域のNPO団体とも連携し、持続可能な地域とこどもの未来を築いていくことが重要です。

文責: 浅野 由子

(国際シンポジウムコーディネーター・大会幹事・日本女子大学)

提言 2

自然との共生を意識しながら環境を維持しつつ、子どもと大人が楽しみながら森を大いに活用していこう!

● 分科会I: 子どもたちが活用できる森とは?

—日本女子大学西生田キャンパスを例として—

都市部やその近郊に残された森は様々な意味でも貴重なものです。しかし、森に人が入らないことでスズメバチが増えたり、ウルシがはびこったりとどんな人を寄せ付けない森となってしまいます。とりわけ子どもたちと森に入る場合は、そういった危害を与える動植物により意識を払わなくてはなりません。

今回、森でのWSやそれを受けての分科会を通して、定期的に森へ入ることの意義を改めて感じさせられました。半日の活動に向けて、何度も森へ入り、そこにどのような動植物がいるか、どのようなハザードがあるかなどを確認してきました。その中で、子どもと共に森を楽しむためには、大人たちの協力で森に最低限の手を入れること(活動できる場を確保するための草刈り、危害を加える恐れのある動植物の駆除、自然と出会うためのきっかけづくりなど)が必要だということを感じました。また、1回だけのイベントにするのではなく、継続的に森とかわることで、そのこと自体が森の維持していくことにもつながるということが分かりました。

文責: 請川 滋大

(分科会Iコーディネーター・大会副実行委員長・日本女子大学)

提言 3

「生活習慣」や「遊び」を中心とした「生きる力」を育む「場」を整備する為に、地域の「産・官・学」の多様な人材ネットワークを見える化する！

● 分科会Ⅱ：こどものクライシスから地域の持続可能性を考える

分科会Ⅱでは、3名のパネリストのご講演から豊島区のWAKUWAKUの子育てに関わる多様な活動から、地域では、様々な人々がつながる「場」を設定していること、そして食に関しては、地域で、「サザエさんのテーブル」を囲めるような3つの間（仲間・時間・空間）を提供出来る「場」を設定する必要性が話し合われました。その為には、大学生やボランティアの参加も含めた、縦だけでなく横のつながりが地域の持続可能性を支えることになるということが話し合われました。そこで分科会の大会提言は、「地域の『産・官・学』という子育て支援事業ネットワークを見える化する」ことが重要であると考えました。

文責：浅野 由子
(分科会Ⅱコーディネーター・大会幹事・日本女子大学)

提言 4

こどもが健やかに成長していくために、からだをつくる「食」と大人一人ひとりが向き合い、こどもたちに寄り添いながら、食育を実践しよう！

● 分科会Ⅲ：こどもの健康と環境

近年、女性のやせ志向の高まりから、小中学生から不適切なダイエットをするこどもや、歪んだ体型認識をもつこどもが多く見受けられます。女性が妊娠中に低栄養状態にあると胎児の疾病リスクを増加させることが報告されており、これらは次世代に受け継がれてしまうクライシスの一つと言えます。

こどもが健やかに成長していくためには、学校や地域において、適正な体型認識により適正な体格を維持することの重要性を伝えていくことが大切であると考えます。適正な体格を維持するということは、食や栄養の知識と、さらに知識を食行動に変える実践力も必要です。それは、自分で「何をどれだけ食べたらよいか」がわかる食の自己管理能力です。そのためには、食育をさらに充実させていく環境づくりが必要です。こどもだ

けでなく、大人にも食育が必要だと言われる現代です。幼少期の食体験は生涯の食生活の基盤となるため、こどもの頃からの食育を継続して実践することが求められます。食べることは生きることです。まずは大人一人ひとりが自分自身の食生活を振り返り、食の大切さについて考えること、それが次世代を担うこどもたちの健康につながる第一歩であると考えられます。

文責：野田 聖子
(分科会Ⅲコーディネーター・大会実行委員・日本女子大学)

提言 5

こどもの情動の発達や対人関係能力の育成を促すために、こどもや大人がワクワクする・熱中できる遊びや学習環境、またこども同士の関わり、こどもと大人との関わりができる環境を提供しよう！

● 分科会Ⅳ：こどもの精神的ストレスと支援

近年、こども達の学習環境は充実していますが、情動教育や対人関係能力の育成については様々な課題があります。今回の分科会では、保育・教育・医学的観点よりこどもの精神的ストレスの特徴、実際の支援についてご紹介頂き、特に、こどもの情動や対人関係能力の乏しさから、こどもの精神的ストレスが生じやすくなることを改めて認識することができました。

こどもの情動の発達は、乳児期から2歳頃までに基本的な発達をとげて、その後さらに細分化し、5歳頃には大人にみられる情緒が一通りそろうと言われていています。これまで、こどもは遊びを通して情動を育む、と様々な研究や実践結果より報告されています。当分科会では、今回さらに踏み込んだ内容として、「ただ遊ぶのではなく遊び込む、つまり、こどもも大人もワクワクする・熱中できる遊びの提供、その環境づくり、遊びや学習を通じたこども同士の関わり・こどもと大人との関わりの場の提供」の必要性を提言しました。

今回、社会環境と個人の脳内環境が互いに関連することを学びましたが、このことを理解した上で、今後のこどもの精神的ストレスへの具体的支援方法や内容について、こども環境に関わる様々な専門家の先生方のご助言をいただきながら検討、対応できるように進めたいと考えています。

文責：三木 祐子
(分科会Ⅳコーディネーター・大会実行委員・帝京大学)